特集

匠の肖像

無くならないもののため、技術を残す

今月の人 中谷 敬さん ◆ Nakatani Kei

北前船の交易で栄えた湊町、酒田。現在の本町通り周辺には、港から揚げられる荷物を扱う廻船問屋が軒を連ね、周りには大工、鍛冶などさまざまな職人が集まり、その技術力でまちの暮らしを支えていました。

時代と共に姿を消した、昔ながらの技術とその担い手。しかし現代においても、かたくなに昔ながらの技術を守り続ける匠がいます。

その名は「染色補正士」

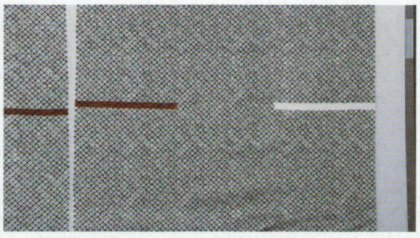
寿町の「中谷しみ抜き店」。趣のある木製の引き戸を開けると、目に飛び込んでくる数々の賞状。同店の三代目 中谷敬さんは、平成29年度全国技能グランプリで第1位を獲得した、国内有数の「染色補正士」です。

仕事の内容を聞くと「ウチは昔ながらのしみ抜き店。着物のお手入れ全般を請け負いますが、一番は染色補正ですね」

「染色補正」について尋ねると、中谷さんはおもむろに2枚の生地を見せてくれました。意味がわからず首をひねっていると、中谷さんは説明してくれました。

「白い線は赤い線も含めて色を抜いたもの。中央の柄は、脱色した後に書いたものです」

「えっ？柄を…書く？」しみ抜きという言葉を遥かに超えた技術に、しばし呆然となる記者。



▲補正前（左）と補正後（右）

「頑固な汚れは一旦柄ごと脱色して染め直します。布に染料を落とすとにじみますから、脱色するときも染め直すときも注意しないと最初からやり直しです」と、笑顔で言ってのける中谷さん。

「自分より上手い人なんていっぱいいますよ。1位になるのに10年も掛かってしまったわけですし」と謙遜しますが、全国レベルの技術が酒田にあることに、うれしさと誇らしさを覚えました。

技術を保ち、残す

「染色補正は、簡単に言えば汚れ落とし。着物はお茶や踊り、結婚式などの区切りに着ることが多く、次まで間が空きがち。そのまましまっておくと、襟や袖口に付いた汗や皮脂などがしみになってしまうんです」圧倒されている記者に、改めてわかりやすく自らの仕事を解説してくれた中谷さん。

「洋服と比べ物にならないくらい、着物のしみ抜きは大変。生地づくりや染色に掛かっている手間と技術が段違いですから」

先に技術をまざまざと見せ付けられていただけに納得の一言。中谷さんは、18歳から東京と京都で着物について学んだ後、先代である

お父さんの指導の下、染色補正の技術を磨いたそうです。

そんな中谷さんに、自らの仕事の将来を尋ねてみました。

「街を歩いていて、着物を着た人に出会うことってないでしょ？でも、1人もいなくなることはないと思うんです。仕事の幅を広げるのではなく、しっかりとした技術を保ち続ける。着物を愛する人たちのために、居なくなってはならないのが我々職人だと思います」

店を出て振り返れば、中谷さんの工房に再びともる明かり。染色補正士 中谷敬。その確かな技術は、これからも着物を愛する人々のために、この街に残り続けます。